

正宗白鳥

幸田露伴

幸
田
露
伴

私は月に一度くらいは必ず上京しているのだが、或月或日、或出版社に立寄ると、そこでは十人もの青年作家が集っていた。私も招れて、その集りにちよつと顔出しはしていたが、いかにも不調和な感じがした。昔、私がまだ二十代で、ようやく文壇に出掛った頃、依田学海という、漢学者で、新時代の文壇にも活躍していた老文人に二三度会ったことがあったが、今の私は、あの時分の学海翁のように老いているのだ。年少の私は、読売新聞

の記者として、佐々木信綱氏宅の晚餐に、二三年続けて招かれたことがあったが、その時の相客は、上田敏であったり、小栗風葉であったりした。そして、近所に住んでいた学海翁は佐々木家とは親しかったので、毎回この晚餐の席に加わっていた。よく喰いよく語り、時々は気焰きえん万丈の趣きがあった。「年を取っても、依田先生のように元気で暮したいと思えますよ」と、上田敏さんは、一しよに本郷の方へ帰る途中で、私に話した。「依田先生も一人でしゃべっていて、他人の話なんかちつとも聞いていませんね」と、風葉は老人気質を晒わらっていた。私な

ども、時によると調子に乗って昔話などをして、よくしやべりたがるのである。慎まなければならぬと感じた。

青年達の集まりは間もなく散会となったが、彼等はそれから銀座あたりに出向いて、新たな会合を催すらしく、群を成して、ごみごみした夕暮の街上を歩いていた。私はその群を見送りながら、一人とぼとぼと電車の方へ進んだ。孤独の感じが胸に迫った。私は東京へたまに出て来ても、雑誌や出版関係の用事以外に、或はそれ等関係者から文壇の噂や世間の噂を聞かされる以外に、知人を訪ねて胸襟を披いて語らんとすることはなかった。会つ

て何かの話をしようと思つたにしても、知友らしい知人は、この世に誰れも留っていないのであつた。それに、日暮れ後は物騒で、電車も混雑するので、私は早目に宿に歸つて、有り合せの書物でも読んで、早く寢床に就くの为例としていた。

私の読む書物は、昔から有り合せの書物であつて、特に誰の作つた何を読みたいと熱望することは稀れであつた。この頃は往復の汽車のなかで聖書なんかを読んで、この頃の新刊雑誌上の評論や作品に劣らない新味を覚えたりしている。今泊っている宿屋は、学生向の下宿屋な

ので、私は空巢ねらい見たいに、空いている部屋に泊めて貰うことになっているが、それ等の部屋には、何かの書物が置かれているので、私は帰宿後から就眠時刻までの間に、それらの書物のどれかを無断借用して、読み耽ることもあった。今度は、明治三十年代に博文館で出版した幸田露伴叢書が目についたので、珍らしい思いしてところどころ読んだ。「僥倖」「ひげ男」「珍饌会」など。

——ひげ男は戦国時代の武士を武士らしく書いた者で、昔の文章としての名文だが、今の我々には読みづらく、且つ面白くないものである。「珍饌会」は食べ物せんさくの穿鑿

が随分行届いて、露伴も紅葉の如く、都会人として味覚の発達した食通であつたことが推察される。「僥倖」は、饗庭篁村なんかの作中によくあるような、滑稽味のある、心学染^じみた浮世噺で、露伴もあの時代の旧めかしい作家並みにこういう小説をよく書いた。「足らぬほどの生活にせよ、家内に病人なくて、主人は主人だけに働き、女房は女房だけに身を持ちて行く世帯ならば、福はまずこれにて沢山、その上は正体の得知れぬ運というものの舞込んで来たら、人のたくみの鉤の上を飾る香餌^{えさ}か、天の試験の火に寄せられたる問題かと、よくよく用心してか

からねば、大抵は愚かにも釣られる魚となるか、悲しくも焼かるべき罪あるものとなりて、憂き目を見るべし」と、日頃心学臭いことを語る老人ありというのが、この小説の書出しだが、あの時、明治二十年代の作家は、こういう筆法、こういう処世観で小説を書いたものだ。紅葉は文の人、露伴は想の人と、通俗的に断定されていたが、露伴の「想」もこの程度のものであった。「僥倖」の主人公は、私立銀行員で、実直に勤めていたのだが、千円の富籤に当たったため、周囲の同僚に取捲かれて遊びの味を覚え、それから迷いの道に入って、ついに乞食の

ような境地に落ちたと云うのである。「大珍話」という小説は、邯鄲枕上廬生の夢を、世話に碎いたようなもので、中華小説の翻訳のようなもの。乞食が奇術によつて美貌になり、金も出来、色女も出来、浮世の栄華を経験したと云うのだ。浮世の大路小路を歩いた果てに、栄華にも飽いて、心中を企てたのだが、死んだと思つて目が醒めると、眼鏡橋（今の万世橋）の傍の柳の下にひよっこり出て、やっぱり元の乞食であつた。当人大欠伸あくびして、「思えば思えば下らねえ、おれの望んだ世界というものは、あんまり可笑なものじゃなかつた。あんなものならはじ

まらねえ、ハツクシヨ」と云うのが落ちなのだ。「ひげ男」のような武士的名文が露伴の本領のように云われていたが、團十郎が活歴的時代物を本領としていたとともに、滑稽味のある世話物に手腕を見せたと同様、露伴も、江戸ッ児だけあって、洒落っ気のあるものをも書流していたのであった。あの時分、露伴は團十郎で、紅葉は菊五郎であると概括的に決められていたが、紅露はまだ二十代であり、團菊は既に人間五十の定命を過ぎていたのだから、比較は当を得ていないのであった。

紅露時代というと、私の少年の頃で、幸田は、「ミユ

キダ」と読むのであろうかと、田舎で独りで考えたこともあった。それで、これ等の大家と私との間には、年齢に於て非常な隔たりがあるように思われていたが、実際は旧式に云つて、一廻りの相違があるだけであつた。同じ卯の歳で、十二歳の差に過ぎないのだ。八十歳を超えてるまでも生きていたのだから、心境はどういう風であつたかと、私は露伴についてさまざまに空想を凝らしたのであつたが、私自身がすでに老境に達しているのだから、人の事よりも自分の心境を考察すればいいのである。私の老人心境から推して露伴の老人心境も分る筈だ。露伴

は偉大なる文豪であつたにしても、その老人心理が我々とそうちがつていようとは思われぬ。老いて戦災に罹^{かか}つた悲しみ、老いて身体の不自由になつた悩み、続々と旧知の死に接する淋しさ、どの老人も感ずるような事を、彼も同様に感じたにちがいない。地方へ避難した時、「おれのような老人をこんなひどい目に会わせて」と、泣いて悲んだことが、側近者の追憶記のなかに書かれてあつたのに、私は同感した。

たまたま、斎藤茂吉編の「幸田露伴集」が寄贈されたので、これを縁に、私は新にこの文豪の文学を鑑賞する

つもりで、この一卷をも通読した。初期から晩年までの短篇の代表作が注意深く撰抜されているので、手っ取り早い露伴研究には便利である。

「風流仏」をはじめ、いかにも読みづらい古風な文章である。私は少年の頃から、露伴の小説は分りにくく、また分っても左程の興味が起らなくって、むしろ嫌悪を感じていた。山奥へ旅して偶然美人に出会うという趣向は、明治二十年代のはじめの小説作家の好みにならっていたらしく、今思出したただけでも、紅葉の「色懺悔」や緑雨の「弓矢神」(?) などには、山の中に美女が独りで住

んでいることになっている。それ等の多くは昔物語であり、露伴のは現代の話であるが、どちらにも、夢のような作り話であることは同様である。当時の読者はそういう小説を好んでいたのだろうか。その頃も小説撰者の多くは青少年であつたのだが、彼等は、そういう愚かな作り話を喜んでいたのであるか。「風流仏」は露伴の出世作であつたが、彼は、それにつづいて、「対髑髏」という、風流仏以上の夢幻的の奇異な小説を書いたのであつた。その頃の評家は、紅葉を写実派の作家とし、露伴を理想派の作家としていたが、露伴のそういう小説にどんな理

想があるのであろう？　これ等露伴の作品には鏡花の趣味と一抹相通ずるところがある。鏡花は、なぜ自分と多少類似性のある露伴に随いて教えを乞おうとしないで、共通するところの少い紅葉の門に赴いたのであろうか。

私は、少年の頃、民友社から出版された小説集「国民小説」によつて、露伴の「一口劍」と紅葉の「捻華微笑」を読んで面白いと感じたことを覚えている。「一口劍」には「精神一到何事か成らざらん」という教えがそこに含まれていることを、年少の私も感づいていた。或刀鍛冶が艱苦して名刀を作り上げ、その切れ味を疑う買い主

に對し、便々たる腹を出し、「切れ、これを、たしかに二つになつて見せん」と云つた結末の文句は、その頃から私の記憶に刻まれている。この刀鍛冶正蔵の如きは、露伴好みの人物で、「五重塔」ののっそり十兵衛にも似通っている。

露伴は自然主義以前の作家である。西洋文学の感化は殆んど受けていない作家である。紅葉はたびたび西洋種を翻案したが、露伴はよく中国文学を取入れていたようである。露伴は純東洋風で、保守作家であつた。鷗外逍遙紅葉に比べて、露伴は東洋的学者の素質を豊かに具え

ていたようだが、文章も東洋味たっぷりである。紅葉の江戸文学調の踏襲とは異り、仏典や漢土の古典を取入れて、文章の綾となしている。私など年少期に漢詩を多少学んでいたもので、漢文まがいの文章に興味を覚えるのであるが、露伴の文章によって陶醉感を覚えたことは殆んど無かったと云っている。高山樗牛は漢文調で面白く読ませたのであったが、漢学の素養のあまりなかった彼は、自分勝手な造語によって調子をつけていた。露伴の漢文的用語はそれぞれに根拠があるかも知れないが、音調の快音、表現の美がありそうにもない。私は、これ等の文

章を読むたびに、自然主義者が文章のための文章を排斥し、無技巧説を唱えたのは当然であると思うのである。樗牛は文芸時評に於て、「紅葉露伴を葬れ」と屢々放言していたが、これは旧文学の代表者としてこの二人を目の敵にしていたのであった。自然主義者も、先ず紅葉露伴の文章や作風から脱却しなければならぬと考えていた。紅葉は自然主義勃興前に逝去したのだから、時代の変遷に神経を悩ますことはなかつたし、露伴は鷗外などと比較にならぬほど、頭脳の融通性が乏しかったので、持って生れた自己を守る外なかつたのであろう。

「二日物語」は、露伴の前半生に於てみる代表作と云つてもいいかも知れぬ。発表当時、名文として誉れ高かつたものである。文章についても、思想についても研究に価いしているように思われる。二日物語中の「此一日」の方は、崇徳院の亡霊を材料として、人間の妄執煩惱の凄さ恐ろしさを力説したものである。撰集抄、雨月物語を思出させるものである。

馬琴は「弓張月」に於て、西行の代りに為朝をして崇徳院に對面させているが、これは小説の趣向に利用しているので少々凄味が乏しい。秋成の「雨月」は單純にし

て、作者特有の凄味がよく現われている。「此一日」では、西行の熱心な説法、誠実な諫言を退けた崇徳院が、「山壑もたじろぎ、木石も震ふまでに、凄くも打笑はせ玉ひて、おろかなり。圓位、佛が好ましきものにもあらばこそ、安樂を望むに足らず、苦患も避くるに足らず、何を憚りてか自ら意を抑へ情を屈めん。妄執と笑はば笑へ、妄執を生命としてわれは活き、煩惱を筋骨としてわれは立つ。——恨みは恨み、讐は讐、かへさで我あるべきか。今は一切世間の法、まつた一切世間の相、森羅萬象人畜草木、悉皆わがみの敵なれば、打くづさで已

むまじきぞ。心に染まぬ大千世界、見よ見よ、火前の片羽となし、風裏の纖塵と為して呉れむ。佛に六種の神通あれば、われに千般の業通あり、ありとあらゆる有情含識皆わが魔界に引き入れて、わが眷属となし果つべし」と、烈しい胸中の思いを吐露するのである。これが言文一致調であつたなら、威嚴がなく、烈しい憎悪感が現われなかつたかも知れない。しかし、そう感じるのは、私などが幼少期から古風な文章を読み馴らされていたためではあるまいか。現今の若い読者は、こんな文章に接すると、読みづらい思いをするばかりで、詞句の有ってい

る魅力は些^{すこ}しも感じないかも知れない。それに、私が今度読終った感じから云うと、文章も型の如く、内容も型の如しと思わるるのである。古今の名文にしても、よく読むと、多くは型の如くなので、文章に捉われない、生氣潑刺たる文章は甚だ稀れであるのだ。今日の文壇に於ても、何度読んでも見飽きのしない文章はそんなに見当らないのである。文章ばかりでない、思想もそうだ。私は、「彼一日」を面白く読んで、「独り合点」の感慨に耽ったのである。ここに含まれているのは、露伴独得の人生観ではなく、有り振れた、昔からの日本人好みの仏

教的悟りを説いているのに過ぎないのだ。私などもこう
いうものを読むとちよつとはすがすがしい気持になるの
であるが、それは一時だけで、要するに浅はかなものな
のだ。先祖以来長い間の習慣で、そんな気持になるだけ
なのだ。自然主義はこんな気休めの人世解決を抛棄して、
新たに人生を觀んとしたのであった。露伴は文章に於て
も人世觀に於ても型を守った人であつたと、私は今度痛
切に感じた。古来の型を守って疑わなかつた人であつた
のか。

「彼一日」は、西行が出家遁世してから、十三年ほどを

経た頃、或夜長谷寺の観音堂に参籠していると、そこへ、参拝に来たものがあつたので、菩提の善友であると、目を留めていたが、それは、十三年前に別れた妻であつた。妻も夫の遁世に感化されて仏門に入っていたのであつた。夫婦共に大悟の道に就いたのだから結構なのだが、ただ小さな一人娘の事が妻には気になり、恩愛の絆にひかれて悩むのであつた。しかし、西行は、娘はすでに西行自身の手で剃髪せしめ、仏の道に入らせたと、妻に知らせたので、妻も安心して、二人は月の光のうちに端然と合掌するのであつた。娘は、父に説き悟されると、直

ちにそれを受入れて、「父上既に世を逃れ玉ひぬ。おのれ、御後に従はんとこそ思へ。世に百歳の夫婦も無し。なにぞ一期の恩愛を説かん。たとひ思ふこと叶ひ、望むこと足りぬとも、娟みを蒙り羨を惹きて在らんは拙かるべし。——あながち、御佛を頼みまゐらせて浄土に生れんとにはあらねど、如何なる山の奥にもありて、草の庵のその内に、荆棘を簪とし、粟稗を炊ぎてなりと、たゞ心清しく月日経ばやなど思ひたること幾度となく侍り、睦ぶべき兄弟も無し、語らふべき朋友も持たず、何に心の残り留まるところも無し。——雲は舊に依つて白く、

山は舊に依つて青からんのみなり、全く世をば思ひ切り侍りぬ」と、云つたそうである。十六歳ばかりの少女の言葉としては、甚だ小間しやくれた言草である。一場の夢物語として読んで、一時の興を覚えるのであるが、こんな人生解決はたわいのないものである。露伴三十四歳の折の作品であるが、今日、三十を越したばかりの若い作家が、こんな悟りすましたことを書いたら可笑なものだ。昔の作家は、頭脳が傑れていて、早くから高遠な境地に到達していたのであるろうと、我々は稍々もすると買被るのであるが、それは大間違いなのだ。露伴も、型通

りの名文調で、型通りの悟りの道を説いたのに過ぎないのである。昔私は史劇「名和長年」の上演を帝国劇場で観て、型通りの忠君愛国芝居であるのに飽足らぬ思いをしたが、或劇評家は、男を泣かす芝居としてこれを賞讃していた。「二日物語」「名和長年」など、昔の日本の知識階級の子精神活動の見本と云ったような者である。「名和長年」劇で松助の扮した暁心、「此一日」に於ける崇徳院などは、團十郎の活歴芝居の人物のようである。それで、作品の上から受ける露伴の人生観がどっしりしているように見えるのは、伝統的古くさい日本精神に腰を

据えているからなのだ。要するに露伴は日本の旧文学の最後の一人なのだが、最晩年に、「観画談」「幻談」「雪たたき」など、前期の作品よりも却って生彩あり、文章が明晰で、筆致がゆるやかで、動脈硬化のしるしが全く無いようなのは珍らしい。型のようにあつた作風から脱出して、新味を發揮しているのは面白い。「土偶木偶」よりも「幻談」の方が、一層すぐれた芸術なのだ。

明治以後の文学者で、鷗外や露伴は、自分の才能を發揮し尽くした幸福な大家であると云つていいのだが、我々文学愛好者は、こういう大家から、つまりは何を学

ぶのであろうか。露伴は、教訓書や修養書を屢々発表し、他の作家よりも、世人に道を教える態度を執っていたのであるし、作品のうちには、人間の生き方を、明らさまに説くか、或は暗示しているところがよくあるのだが、私は、そういう意味で露伴の作品に感激したこともなかったし、自分の人生の見方や処世態度に変化を来したこともなかった。露伴は見かけからして巨大な文学者であって、博覧強記の権化らしく、且つ長寿を保っていたので、重々しく我等の目に映るのであるが、露伴文学の境地には、私などは安住し得ないのである。これは私の

批判力が幼稚であるためだとは思わない。人によって好み
みが異なるので、文学鑑賞に於ても、その差別はいかんと
もし難いのである。私は文学についても、それによって
一時の快感を得るだけではなく、人生の真核に徹したも
のを見たいと願っていた。「如何に生くべきか」「如何
に死すべきか」を、傑れた作品に於て看取したいと、ひ
そかに望んでいた。露伴は、明治以来の大家のうちでは、
そういう問題に心を向けていた作家らしく思われていた
のであり、彼自身、小説が年少者向きの読物になってい
るのを遺憾とし、大人向きの小説を書かんとしていたら

しいのであるが、その大人向きの「名和長年」や「ひげ男」や、或は「二日物語」などが、ただ大人向きの鑄型から出たもののように思われるのである。しかし、考え様によっては、作家に多きを求めるのは間違いであって、作家はそれぞれに、一つの型に捉えられるのが常例なのである。悟道に入った西行が自己の心境を述べている。「首を回らせば往時をかしや、世の春秋に交はりて花には喜び、月には悲み、由無も亡情の往来に、泣きみ笑ひみ過ごししが、思ひたちぬる墨染の衣を纏ひしより今ははや、指をかぐなふれば、十あまり三歳に及びて、

秋も暮れたり。修業の年も漸く積もりぬ。身もまた初老に近づきぬ。流石心も澄み渡りて亂るゝことも少くなり、舊縁は漸く去り盡して胸に纏はる雲も無し。忽然としてそのはじめ一人來りしこの娑婆に、今は子然けっぜんとして一人立つ。待つは機の熟して果の落つる我が命終の時のみなり云々」

これは、西行の代弁としての作者の詩的述懐であるが、四十という迷い多き歳に、こういう澄み切った心境に浸っていられるであろうかと、私には懷疑の思いがされるのである。西行が必しもそうでなかったと思われるが、

露伴自身もそうではなかったのじゃないかと疑われる。今日の三十余歳の青年文士にこういう澄み切った心境は求め難いであろうが、昔の青年だって本当はそうでなかったのであらう。ただ自分の心境を一つの鑄型に入れて、そういう心境を夢見ていたのに過ぎなかつたのではあるまいか。西行時代の西行は、或はああいう生活振りに単純に入つて行けたのかも知れないが。今日は余程痴鈍な青年でもそうなれないに極っている。

夢のような理想境を好んで描いていた露伴も、予期しなかつた事変に遭遇して、紅葉も鷗外も知らなかつた人

生を見たのであったが、彼はそれによって過去の自分の人生観自分の理想境を抛棄して、新たに人生を見直すような事はなかった。西行の澄み切った悟りの境地などは、痴人の夢で、今日の現実に触れては存在し得ないことを痛感もしなかつたのであろう。私は、自分で千載一遇という異常の時代に生存していながら、人間について、社会について、新なる見解、真実の底までも見破るような徹底した見解を得るに至らず、昔ながらの頭で、呆氣に取られて周囲を見ているような有様であるのに齒痒い思いをしているが、露伴の述作を読んでも、最新の青年文

士の作品を読んでも、老若同様に、傾聴に値いする新たな人間描写、人間批判は見られないのである。人間はいつまでたってもそうなので、それだから、いい気になつて生きていられるのか。露伴の「幻談」は、神秘境を示していて面白く読まれたが、この頃の青年作家の妖気の漂う作品と、清濁の相違はあつても気持の似ている所のあるのは、時世の然らしむるところかと、私はふと考えたが、それも愚かな思い過しであろうか。

日本文学電子図書館

幸田露伴

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第6巻、新潮社

昭和40年8月25日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館